



日 口 交 流

発行 : 特定非営利活動法人 日口交流協会
E-mail:nichiro@nichiro.org
Home Page http://www.nichiro.org
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号
Tel : 03 (5563) 0626 Fax : 03 (5563) 0752



ロシア語現地学習会レポート

近藤 麻美

この夏、8月4日から11日までロシア語現地学習会に参加した。

ハバロフスクは成田空港から直行便で3時間弱。ヨーロッパ調の建築物や聖堂があり、緑が多く色鮮やかでゆったりとした美しい街だ。太平洋国立大学は中心部から少し離れていて緑が更に多く、滞在先の寮の窓からは青々と繁る木々が見えた。気温は日中は暑くても25℃前後、夜は肌寒く感じるほどで、日本の灼熱に疲れていた身体には心地よかった。

大学での授業は1.5時間の2コマを5日間の計15時間で、3人の講師がそれぞれ時間を割り振って講義をしてくださった。基本的な文法を使った会話練習、極東ロシアを紹介するロシア語の映像を見てその内容について話すもの、発音と早口言葉の練習とロシアの唱歌を歌うというもので、慣れるまで難しいものもあったが、フレンドリーな雰囲気ですぐにそれぞれの異なるアプローチ方法で楽しみながら学習することができた。

午前の授業を終えると、午後は参加者たちで市内観光へ繰り出した。ロシア正教の教会、アムール川の遊覧船クルーズ、市場への買い物、博物館やビール工場の見学などで、なかでも特に私の記憶に残っているのは在ハバロフスク日本国総領事館への訪問と日本センターでのロシアの方たちとの交流イベントだ。

総領事館では、この街の現状と日本との関わりを歴史を交えながら紹介いただき、そのなかでハバロフスク在住の日本



日本センターで

人が40人程度ということも伺い、地理的に近いにも関わらずその少なさにも驚いた。

その後訪問した日本センターでは、事前に聞いていたものの実際に参加者と会ってみると想像以上に日本語が堪能な方が多くて、交わす言葉はほぼ日本語で申し訳なくなるほどで、熱心に日本について聞いたり話したり

してくれる姿にまた頭が下がる思いだった。参加者は30人以上で、話す時間が足りないほどだった。この時には日本から持ってきた浴衣を有志で着ていたのだが、とても好評で私も嬉しかった。毎日が色鮮やかで刺激的で、穏やかな時間の流れるハバロフスクで過ごすうちに、帰りたくないという思いが強まるばかりだった。

今回現地学習会と共に参加された方たちとはほぼ初対面だったが、それぞれロシア語学習のきっかけを語り合ったり、寮では毎晩テレビから流れてくるロシア語を聞きながら話をしたり、勉強方法などの情報を教え合ったりしたことは、日中の授業に加えて大いに刺激になった。

ロシア語を学び始めて1年足らずだったので語学力の不足は痛感したが、ロシアへの興味と関心は増すばかりだった。この学習会へ参加した経験を活かして、またロシアを訪れたいと考えている。

お知らせ

●第65回マトリョーシカ絵付け教室

日時: 2019年10月12日(土) 13:00~16:00

講師: 菅野エレナ

場所: 田町駅みなとパーク芝浦、「リーブラ」学習室E

会費: 3,000円(5個セットの教材、講師代、お茶代含む)

*11月14日に赤羽会館で行われるコンサート(ロシアのプロによるピアノ、フルート演奏など)会場で展示、販売あり。

●冬期ロシア語現地学習会

日時: 2020年2月9日(日)~16日(日)

*授業は月~金の午前のみですが、別途有料で午後個人レッスンも受けることができます。

場所: ハバロフスク 太平洋国立大学

費用: 会員90,000円、一般100,000円(授業料、寮費、市内観光、交流イベント、ビザ、現地空港送迎費含む)

*航空券代は含まれません。

締切: 2019年10月18日(金)

*パスポートの残余有効期限が入国日より18ヶ月以上必要。

●エカテリンブルグへ行く

日時: 2019年12月22日(日)~29日(日)

対象: 18才~35才までの会員

費用: ビザ代、往復航空券代(予約時期により上下します)

*現地宿泊代、見学、交流費用は現地受け入れ側負担。

受け入れ: エカテリンブルグ情報文化センター

締切り: 2019年10月31日(木)

*但し、定員数に達したら締切ります。

●集中講座「ロシア語でおもてなし」

日時: 2019年10月20日と27日、11月17日と24日、
12月15日と22日(日) 13:30~16:30

費用: 会員15,000円、一般18,000円(6回18時間)

講師: オクサーナ・ピスクノワ

場所: 田町「リーブラ」(11月17日のみ新橋生涯学習センター)

*お問い合わせ、お申し込みは協会事務局まで

Tel : 03-5563-0626 Fax : 03-5563-0752

E-Mail:nichiro@nichiro.org



宇宙航空研究開発機構(JAXA)講演会に参加して

中村 聡希

皆さまはじめまして、ハッピー・サイエンス・ユニバーシティにて衛星開発を学んでおります中村聡希と申します。9月7日に日本プレスセンタービルで行われたJAXAの鶴間陽正職員の講演「日本とロシアの宇宙開発」に参加させていただきました。実際にロシアの宇宙開発を現場で見てきたお話は、とても新鮮でありましたので、共有させていただきます。

ロシアは宇宙において長らく世界をリードしてきた一等国でありました。ソ連時代には世界初の人工衛星、世界初の有人宇宙飛行、世界初の月面着陸・火星到達など、数々の偉業を成し遂げました。旧ソ連は米国との宇宙開発競争に「ほぼ」圧勝であったというのが、大方の見方ようです。

有人打ち上げには完全な安全性・信頼性が要求されるため、可能な国は現在でも少なく、ロシアの技術力の凄まじさがうかがえます。ソユーズロケットやプロトンロケットに代表される、多数のエンジンが束ねられたクラスターロケットも特徴的であり、小型のエンジンを使うことで信頼性を追求した一つの形だそうです。

余談ではありますが、生物を載せた世界初の衛星として有名な「スプートニク2号」には、ライカという犬が載っていましたが、この「ライカ」というのは犬の名前で、犬種としては雑種、ライカ犬というロシアの犬種がありますが、それとは別物だそうです！私もライカ犬と勘違いしておりましたので、驚きました。

しかしソ連時代の偉業に比して、近年ロシアでは打ち上げ失敗や墜落等の事故が頻発していました。これは、資金問題



による新規開発の不足や技術者の高齢化が遠因で、信頼性の低下を招いたそうです。その改革として、宇宙関係の組織体制を「ロスコスモス社」に一本化、及び国営化・トップの入れ替えを実行し、ロシアの宇宙開発の

再生を図っているとのこと。

現在、ロシアは19以上の国・国際機関と宇宙協力協定を締結しています。日本とも衛星の打ち上げや、ISS・国際宇宙ステーションでの実験、民間でのロケット利用など協力しています。ISSにおいて日米欧などと共同で運用しており、有人宇宙活動や輸送システムの得意分野を中心に国際協力や国際商取引を実施しているそうです。今後予定されている月周回ゲートウェイについても日本、ロシアともに各国と共同で進めているとのこと。

宇宙産業は近年、民間の活躍や月面・火星への進出など、大きく発展しつつあると感じております。その中で、国際協力のもと、その発展に貢献していくことが望まれるものだと考えます。

当方の研究室でも、海外の射場での衛星打ち上げを将来的に考えていたのですが、ロシアの新しい射場の話もお聞きし、民間のレベルでも可能な取り組みを考えていきたいと思っております。非常に学びの多い講演会に参加させていただき、誠にありがとうございました。

(HSU 未来産業学部アドバンスコース1年)



阿波踊り体験会に参加して

慶 のぶ子

南越谷市阿波踊り振興会による8月24日開催の阿波踊り体験会に日口交流協会からの14名の参加者の一員として参加させて頂きました。

私自身、阿波踊りを踊ることはもちろん踊りを現場で見るのも初めての体験で、参加をとっても楽しみにしていました。阿波踊りとは、盆踊りの一種で、太鼓や三味線などの音楽に合わせて集団で踊り歩くものです。四国の阿波国、現徳島県を発祥とする盆踊りで、南越谷にやってきたのは1983年。徳島県出身の中内俊三氏が、故郷徳島の阿波踊りの祭典を通じて、南越谷の地元振興を図るため、誇れる伝統文化祭典の一つにしようとして始められたと言われております。今や、日本三大阿波踊りの一つとして名高い「南越谷阿波踊り」、祭りが初めて開催されたのは、私が生まれた年の1985年。今年で35回目を迎えました。

阿波踊り会場が近づくにつれ、聞こえてくる太鼓や鳴り物の音楽が勇壮に胸に迫ってきました。そして頭には笠・足先は足袋で文字通り頭から足先まで全身衣装に身を包んで音楽に合わせて踊る阿波踊りを間近に見るとその迫りに圧倒されました。各チームが踊りを披露していたのですが、阿波踊りといってもそれぞれ踊りの振り付けや音楽が異なり、どれも芸術性豊かで完成度が高いと感銘いたしました。小さい子どもから高齢の方まで年齢や性別を問わず一体となって楽し

む、このような踊りが日本の伝統芸能であることに誇りを感じました。

私たちは、「にわか連」というチームに所属させて頂き、体験教室で阿波踊りのリズムや振りを事前に学ばせて頂きました。見た目よりも足腰・また腕の筋肉も存分に使っているのを感じますが、踊っていると自然と笑顔になります。

体験教室が終わるといよいよ本番で、皆さんと一緒に街中の踊りに加わらせて頂きました。皆で踊る一体感や踊り終わった後の達成感と充実感で満たされた事を今でも鮮明に覚えています。今回のイベントに参加していたロシア人の方もとても楽しまれていました。

ちなみに、ロシアと阿波踊りの関係を調べてみると文化交流が何度か行われているようです。モスクワの赤の広場で夏に毎年開催されている軍楽フェスティバルに、阿波踊りが披露されたこともあるそうです。ロシアの方との文化交流に一役買っている阿波踊り。日本の伝統芸能や文化がこのように国を超えて共有されていることを嬉しく思います。今後も、このような活動を通じ日口の交流がより深まり友好が広がっていくことを願います。

最後になりましたが、今回のイベントにご協力頂きました越谷観光協会様、にわか連の皆様、関係者の方々に心より御礼申し上げます。

《モスクワ・アラカルト55》

手話言語で表現するチェーホフの世界

日向寺 康雄

10月18・19・20の3日間、池袋の東京芸術劇場プレイハウスでノヴォシビルスクのレッドトーチ(クラスヌィファークル)国立アカデミー劇場がチェーホフの「三人姉妹」を全編手話で上演する。演出は同劇場のT. クリャービン。古典に現代的解釈を加え、斬新かつ大胆な発想で作品の本質を際立たせる手法で注目されているロシア期待の若き鬼才(35歳)だ。2014年にはプーシキンの「オネーギン」をロシアで最も権威あるモスクワの演劇コンクール「黄金のマスク」で上演し、非常に高い評価を得た。

その一方、翌15年に地元ノヴォシビルスクのオペラ・バレエ劇場で演出したワグナーのオペラ「タンホイザー」は、ロシア正教の「熱心な信徒達」を激怒させ、劇場支配人の交代騒ぎを引き起こした。何とタンホイザーを、キリストを主人公としたポルノ映画を撮影する監督に見立てるといふ余りに自由過ぎる舞台を創り上げたのだ。彼の評価は、演劇界でも観客の間でも大きく分かれるが、こうした革命の実験にロマンを感じ面白がり応援しようというロシア人の伝統的気風は、今のプーチン政権下でさえ十分健在である。ポリショイ劇場は今春、ドヴォルザークのオペラ「ルサルカ」の初演を彼に任せた。

今回日本で紹介される「三人姉妹」は2015年の作品で、彼は舞台言語に手話を選んだ。俳優達は、その習得に1年、舞台稽古にさらに1年かけ、チェーホフの代表作の一つを時間をかけてじっくり仕上げた。上演時間は4時間を超える。今や資本主義国となったロシアにおいて、字幕も含め大掛かりな装置を使い観客席も少ないこのお芝居は、採算面から言っ



て正直きつい。それでもやる、やれるロシアの明日は、決して暗いばかりではない。

劇場が、シベリア開発の拠点として建設された新しい町にあり進取の気風と未来志向的なエネルギーに満ちている事、作品の中で主人公達が「モスクワへ」という叶わぬ夢を絶えず語りながら「今いる場所」で生き抜く絶望的覚悟を決め、新たな出発を告げる事などを考えれば、シベリアの首都で「三人姉妹」を舞台にかけた意味は限りなく深い。そして主人公達の心の叫びを、音声言語によるセリフでなく、身振り手振り、表情を中心としたろう者の言語で表現したい、そうすれば作品のメッセージをより本質的な形で直に観客に伝えられるのではないかと考えたクリャービンの芸術的直観は鋭く、正しい。

私とろう者の友人は大学時代、世界初のプロのデフシアター、モスクワ・パントマイム(直訳では「身振り手振り、顔の表情」)劇場に魅かれ、岡田嘉子先生や交流協会、日本聾唖連盟の皆さんの協力を得て「トウキョウへ」という劇団の夢を叶える事ができた。彼らを産み育てたソヴィエトはすでに崩壊して久しいが、手話言語の可能性にロマンをもち続ける演劇人が今も変わらずおり、新生ロシアで新しい花を咲かせていることは、本当に嬉しくてたまらない。

(元モスクワ放送チーフアナ・現在大学非常勤講師)

モスクワ「ムセイ」巡り・その17

モスクワ鉄道博物館

Музей железнодорожного транспорта московской железной дороги

大矢 温

ロシアは世界有数の鉄道大国だ。国土が広いので鉄道のスケールも大きい。我々日本人も、シベリアの大地をひた走るシベリア鉄道に昔から旅のロマンを掻き立てられてきた(ただし全長9,259kmを7日7晩で走破する現実のシベリア鉄道の旅は相当な苦行らしい)。というわけで、今回は鉄道にまつわる博物館。ロシアの国鉄にあたるРЖД(ロシア鉄道株式会社)直営、モスクワ市内のリーシュスキー駅隣接の屋外博物館だ。2004年に駅構内の郊外電車の発着所だった場所、約1.5ヘクタールを改装して屋外展示場として開場した。東京ドームと同じぐらいの広さなので、小一時間もあれば一通り見て回れるだろう。同じくРЖД直営のモスクワ市内の鉄道博物館としては、パヴェレツキー駅に隣接する屋内博物館があるが、それについては別の機会に紹介したいと思う。

このリーシュスキー駅の鉄道博物館、60種類以上の新旧の機関車(蒸気、ディーゼル、電車)、そして各種の客車や貨車、その他、保線用車両などが展示されている。19世紀末の蒸気機関車「O」(オー)シリーズから、ソヴィエト末期に開発されたロシア版新幹線の試作車両ソーコル250まで、古今の車両をここで見学することができる。ちなみにこのソーコル、最高時速350kmを目指して開発されたものの、結局、本格的な実用には至らなかった。というわけで現在モスクワペテルブルク間を結ぶ高速鉄道はドイツ製の高速列車サブサンで

ある。

寒い国なので、当然のことながら除雪車も展示されているのだが、北海道や東北で活躍しているJRのラッセル車と比べるとちょっと非力な印象だ(意外かもしれないが、モスクワ周辺では日本の豪雪地帯のような雪は積もらない)。また、第二次世界大戦中に使用された食堂車や病院車、前線へ兵士を輸送するために使われた粗末な有蓋貨物車など歴史と物語を帯びた車両も必見だ。鉄道を通してロシアをより深く理解するためにも一度は訪れてほしい。

入場料 大人150ルーブリ

月曜休館

最寄駅 地下鉄リーシュスカヤ Рижская

(<https://goo.gl/maps/BSwJv2EHWPdC9K59>)

(札幌大学地域共創学群教授)



エラブガと函館 交錯する人々

倉田 有佳

9月初旬、タタールスタン共和国のエラブガ（ヴォルガ川支流のカマ川右岸にある）からエカテリーナさんが函館にやって来た。エカテリーナさんは、エラブガ出身のピョートル・プロコフィエヴィチ・バトーリン（1878-1939）をテーマにカザン大学大学院で博士論文を執筆中で、来函目的は、上海で亡くなったバトーリンの墓を訪ねることにあつた。

函館での「バトウリン」の知名度は低く、漁業家デンビーの長男アルフレッドの妻マリアの妹アンナ（愛称ニーナ）の再婚相手（1932年2月）、といった程度の情報しかない。筆者自身、数年前にサハリン樺太史研究会でエドワルド・パールイシェフさん（筑波大学）の報告を聴き、正しくは「バトウリン」で、北サハリンの石油開発のために1919年に結成された「北辰会」と深く関わる人物と知り驚いた。

1918年春、北サハリンの鉱山や石油の採掘権を握る「スターヘーエフ商会」の代表としてバトウリンは日本に招へいされ、「露国経済界の巨頭」として大隈重信や久原房之助など日本の政財界人から丁重にもてなされた。だがその11年後、函館での葬儀に駆けつけた著名人は小西増太郎だけだった。

晩年の小西は、スターリン体制打倒を叫ぶバトウリンと親交を深め、二人でドイツに向かおうとする。まずバトウリンが上海に赴くが、同地で急死したため（スターリンによる暗殺説もあり）、「新しきロシアの夢は破れた」。上海まで遺骸を引き取りに行ったのは小西だった（小西の直孫・吉橋泰男氏の論考より）。

『函館新聞』（1939年9月5日）は、葬儀のため来函した小西



リャザンでの留学生活

毛利 麻記子

現在、私はリャザンという町に交換留学生として1年間勉強に来ています。リャザンは、モスクワから電車で約3時間ほどのところにあります。リャザンは、20世紀のロシアの詩人セルゲイ・アレクサンドロビッチ・エセーニンが有名です。町のいたるところにエセーニンに関連する建物や、銅像が建っています。この町には、緑がたくさんあります。夏になると、道路の脇に綺麗なお花が咲き、木々は緑が美しいです。その中を散歩するのはとても気持ちが良いです。

たくさんのショッピングモールがあり、買い物には困りません。大体のショッピングモールには映画館が入っていて、日本よりもだいぶ安く映画を見ることができます。1回500～600円ほどです。また、大学の近くには、おしゃれなカフェがたくさんあります。「ベトカフェ」という名前のベトナム料理屋さんには、平日のランチタイムにビジネスランチというものがあり、310ルーブルでワンプレートと飲み物が付いて来ます。他にも雰囲気の良いカフェがいくつかあり、私もよくカフェでお茶をします。

学校周辺には、改装したてのサーカスや劇場のような娯楽もあります。寒くなるとスケートリンクが設置され、冬のスポーツも楽しめます。リャザンは、生活に不自由することなく自然も楽しめる、バランスの良い住みやすい町だと感じます。

私の勉強しているリャザン国立大学では、ロシア人の他に中央アジアの国々（トルクメニスタン、ウズベキスタン、タジ



バトーリンの墓の前のエカテリーナさん

増太郎と喪服姿の寡婦アンナが並ぶ写真を掲載している。だが記者が三回の連載で取り上げたのは、「当時親交のあった唯一の日本人」小西が語るトルストイの思い出であり、バトウリンとの関係には触れていない。

ところで、「エラブガ」と聞いて筆者がすぐに思い起こしたのは、15年ほど前、市立図書館（現函館市中央図書館）で閲覧したガリ版印刷の豆本（7×5cm、24頁）「ソビエト捕虜通信」だ。エラブガの第97収容所で1946年夏から約2年間過ごした石川政治が、函館の両親宛てに、「悲惨な食生活やひどい真相も書きたかったが、さしひかえて出した」という捕虜用郵便葉書5通が基になっている。表紙は鮮やかな赤。表紙カバーは灰色。マホルカ煙草を巻く紙として現地の子供から得た紙（古本の一部）が「記念のため」、カバーの装丁に用いられている。

帰国から7年数カ月。函館高等水産学校（現北海道大学水産学部）出身の石川は、市立函館博物館に職を得ており、「ソ連からの引揚船大成丸の舞鶴入港のラジオニュースを聴きながら」、豆本のガリ版を切っていた。

エラブガから函館の土となった亡命者。函館に生還した抑留者。同郷者を函館に訪ねる研究者。エラブガと函館が交錯する暑い秋の一日だった。（ロシア極東連邦総合大学教授）



キスタン、イランなど）からの生徒がたくさん学んでいます。前年には、10人ほどのトルクメニスタン人たちと外国人向けロシア語を勉強していました。日本にいた頃には全く注目しなかった国の仲間と一緒に学ぶこと

は、とても面白いです。文化、言語、民族性など様々なことを知ることができます。日本とは全く異なることが多くあります。学期が終わった今でも、その友だちと会って散歩に出かけています。

リャザン国立大学には日本語学科があり、日本語を勉強している学生がおり、日露クラブという日本で言うサークルのようなものがあります。そこでは、日本人留学生とロシア人学生が関わる機会が多くあります。アニメ好きな生徒がたくさんいて、とても多くのアニメを見ています。日本人の私よりもアニメに関してよく知っており、感心します。このように日本に興味がある学生がたくさんいて、週末と一緒に遊んでくれます。

今までには、ロシア人の友達の家でボルシチやブリヌイを作ったり、女の子だけのお泊まり会をしたり、パスハを祝ったりしました。この写真は、日本人留学生が帰国する前日のお別れ会のものです。多くのロシア人が集まり、思い出を語り合ったり、ロシアの歌を歌ったりしました。皆、留学生の私たちに親切で、毎日楽しく生活できています。ロシア人はもちろん、他の国の仲間とたくさん交流を持るところもリャザンの良さの一つであると感じます。